

## 看護学生の新生児をあやすことへの自信から 見出される背景の検討

渡 辺 さつき  
稲 垣 恵 美  
森 田 せつ子

【目的】新生児と接触経験が稀となっている看護学生の新生児を「上手くあやすこと」に関連する諸要因の検討をした。【方法】看護大学2年生126名に無記名自記式質問紙調査を実施し、有効回答であった112名を対象とした。【結果・考察】新生児をあやしたことがないが33.0%、1～2回あるが9.3%、3回以上たびたびあるが27.7%であった。実際に“新生児を上手くあやすことができると思うか”というあやすことへの自信を7段階で尋ねた。その背景を探るため、きょうだいの人数と構成、接触経験、対児感情（接近得点・回避得点）、基本的信頼感との関連を検討した。3歳以上離れた年下のきょうだいの有無と接触経験の差においてあやすことへの自信に有意差がみられた。あやすことへの自信は、接触経験・基本的信頼感・回避得点とで相関関係があった。上手くあやすには、接触経験を重ね、回避得点を低くしておくことが必要であることが示唆された。

キーワード：新生児 あやす 看護学生 対児感情 基本的信頼感

### I. 緒 言

少子化の中、看護学生が、日常で新生児と接する機会は稀となっている。しかし、母性看護学実習では、妊婦・産婦・褥婦・新生児とその家族を対象とするため、生後間もない新生児の看護も実践することとなる。新生児の看護技術では、新生児の抱き方・おむつ交換・授乳・沐浴などを習得する。そして、実習ではどの技術の中でも、泣き出す新生児をあやしなからケアにあたる必要がある。しかし、実際、新生児が泣き出すことに戸惑う学生は多い。

藤田（2003）は、あやすということを「私たちと赤ちゃんが向き合って言葉を通わせ、心を通わせ、綾なすようにかかわっていくこと」と述べている。大辞林第二版では“（幼い子供などの）機嫌をとる”とある。あやすという行為の一般的な情景は、泣いている赤ちゃんを抱き上げ声をかける、抱き上げた後、ポンポンとリズムをとりながら擦り優しく揺らすなどが思い浮かべられる。保育の分野では、中西（1995）はあやすという行為を第1に子どもと遊ぶ目的で行うあやし行動、第2に子どもの機嫌が悪くぐずっているのをなだめたり、寝かせつけたりする目的で行うあやし行動、そして第3に主たる目的を持たない、あやす側にとって極めて無意識的なあやし行動があると述べている。また、あやし遊びについては、川村・中西（1987・1990）により内容や構造などが明らかにされている。

しかし、看護の分野では現在のところあやすことに関する研究はみあたらない。あやすという行為は、あやす側とあやされる側の相互作用であり、あやす側があやされる新生児としっかりと向き合ってこそ成り立つ。即ち、泣き出すわが子に戸惑いながらも母親がわが子をあやすことを習得することは、わが子としっかりと向き合うことであり母子関係を深めることに繋がる。同様に、泣き出す新生児に戸惑いながら看護学生が育児技術として新生児をあやすことを習得することは、新生児としっかりと向き合い看護の対象である新生児の理解を深めることになる。そのため、新生児をあやすことができるようになることは有用であると考える。

では、実際に看護学生は自分自身が新生児をあやすことをどのように評価しているのだろうか。本研究では、「自分の目の前に新生児がいると想定したとき、実際に上手くあやすことができるという肯定的な評価」を「あやすことへの自信」と定義する。そして、この研究では、新生児看護におけるあやすことの研究の第一歩として、新生児と接触経験が稀となっている看護学生の新生児を「上手くあやすこと」に関連する諸要因の検討を目的とする。「上手くあやすこと」に関連する諸要因として、きょうだいの人数と構成や新生児を実際に見たり・触れたりしたなどの接触経験や新生児への対人感情が考えられる。また、あやすという行為は、対人関係を築くこととなるため、対人関係を築くのに必要な基本的信頼の感覚との関連が考えられる。新生児を上手くあやすことがどのような諸要因と関連があるかを検討することにより、育児技術として新生児を上手くあやすことの習得法の解明に繋げたい。

## II. 研究方法

### 1. 対象

看護大学2年生126名に研究の趣旨を説明し、研究への同意が得られ、かつ有効回答であった112名を調査対象とした。回収率は89%であった。対象は、「母性看護学概論・保健」「小児看護学概論・保健」の科目を終了している。

### 2. 調査期間と方法

期間は、2006年2月15日～2006年2月24日の10日間であった。無記名自記式質問紙調査を実施した。回収は留め置き法で行った。

### 3. 調査内容

#### 1) 対象者の属性

対象の属性は年齢、性別、きょうだいの人数と構成を調査した。

#### 2) 新生児との接触経験

新生児との接触経験を把握するために、「実際にみたことがあるか」「触れたことがあるか」「抱いたことがあるか」「あやしたことがあるか」「世話をしたことがあるか」の5項目について、1：ない、2：1～2回ある、3：3回以上たびたびある、の3段階で調査した。

### 3) 基本的信頼感

Erikson, E. H. によると基本的信頼感とは、生後1ヶ月の経験から獲得され、生涯にわたる自己自身と世界に対する一つの態度であり、他者に関しては筋の通った信頼、自己に関しては信頼に値するという重要な精神力を意味する。谷(1996)が、青年期における基本的信頼感を測定する目的で作成した「基本的信頼感尺度」の基本的信頼感( $\alpha = .790$ )6項目と対人信頼感( $\alpha = .772$ )5項目を7:非常にあてはまる～1:全くあてはまらないまでの7段階で調査した。

### 4) 対児感情

新生児に対する対児感情を測定するため、花沢(1992)の「対児感情評定尺度」28項目を利用し、その項目について新生児を思い浮かべてもらい、4:非常にそのとおり、3:そのとおり、2:すこしそのとおり、1:そんなことはない、の4段階で調査した。

### 5) あやすことへの自信について

あやすことへの自信については、「あなたは実際に新生児を上手くあやすことができると思えますか」について7:上手くできると思う～1:上手くできないと思う、の7段階で調査した。

## 4. 分析方法

分析にはSPSS 12.0J for Windowsを用いた。2群間の平均値の差はt検定を行い、3群間の差の検定には一要因の分散分析を行った。その後の多重比較ではTukey法を使用した。尺度間の相関関係をPearsonの積率相関係数により分析した。要因の関連性については重回帰分析を行った。検定の有意水準は5%以下とした。

## 5. 倫理的配慮

研究説明会で、研究の趣旨、成績評価との関連性は全くないこと、研究への協力・回答は自由意志であることを口頭と文章で説明した。また、いつでも参加拒否の権利があることを伝えた。同意が得られた参加者より無記名の調査票を封筒で密封した状態で回収した。結果は、個人が特定できない型で分析し、結果を学術的に公表することを伝えた。

なお、本研究はN大学看護学部の倫理委員会の審査で承認された。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 対象者の属性

対象者の年齢は、19歳～28歳の範囲で平均20.1歳(±1.2)であった。性別は、女性103名(92%)、男性9名(8%)であった。

きょうだいの人数は、自分ひとりが6人(5.4%)、二人きょうだいが53人(47.3%)、三人きょうだいが46人(41.1%)、四人きょうだいが7人(6.3%)であった。次にきょうだ

いの年齢構成では、G. コーエン (1992) によると思い出すことができる一番古い記憶は3歳頃のことが多いため、きょうだいの世話をした記憶があると考えられる3歳以上年下のきょうだいのいる人数をみた。3歳以上年下のきょうだいがいない人が68人 (60.7%)、いる人が44人 (39.3%) であった (表1)。

表1 きょうだいとあやすことへの自信

	N	%	上手くあやすことへの自信		
			平均	SD	
きょうだい					
自分ひとり	6	5.4	2.2	± 1.5	
二人	53	47.3	3.6	± 1.3	
三人	46	41.1	3.7	± 1.6	
四人	7	6.3	2.6	± 1.0	
3歳以上年下のきょうだいの有無					
なし	68	60.7	3.3	± 1.4	*]
あり	44	39.3	3.9	± 1.4	

\*\*p<.01      \*p<.05

## 2. 新生児との接触経験

表2 新生児との接触経験とあやすことへの自信

	N	%	上手くあやすことへの自信		
			平均	SD	
新生児を実際にみたことがあるか					
みたことがない	16	14.3	2.6	± 1.1	*] **
1～2回ある	55	49.1	3.6	± 1.5	
3回以上たびたびある	41	36.6	3.9	± 1.4	
新生児に触れたことがあるか					
触れたことがない	24	21.4	2.9	± 1.3	*]
1～2回ある	48	42.9	3.5	± 1.5	
3回以上たびたびある	40	35.7	3.9	± 1.4	
新生児を抱いたことがあるか					
抱いたことがない	37	33.0	2.9	± 1.3	*]
1～2回ある	37	33.0	3.7	± 1.5	
3回以上たびたびある	38	33.9	4.0	± 1.4	
新生児をあやしたことがあるか					
あやしたことがない	37	33.0	2.7	± 1.3	*]
1～2回ある	44	39.3	3.8	± 1.3	
3回以上たびたびある	31	27.7	4.1	± 1.4	
新生児の世話をしたことがあるか					
世話をしたことがない	59	52.7	3.1	± 1.2	*]
1～2回ある	30	26.8	3.9	± 1.4	
3回以上たびたびある	23	20.5	4.2	± 1.6	

\*\*p<.01      \*p<.05

新生児との接触経験は、実際にみたことがないが16人(14.3%)、1～2回あるが55人(49.1%)、3回以上たびたびあるが41人(36.6%)であった。

新生児に触れたことがないが24人(21.4%)、1～2回あるが48人(42.9%)、3回以上たびたびあるが40人(35.7%)であった。

新生児を抱いたことがないが37人(33.0%)、1～2回あるが37人(33.0%)、3回以上たびたびあるが38人(33.9%)であった。

新生児をあやしたことがないが37人(33.0%)、1～2回あるが44人(39.3%)、3回以上たびたびあるが31人(27.7%)であった。

新生児の世話をしたことがないが59人(52.7%)、1～2回あるが30人(26.8%)、3回以上たびたびあるが23人(20.5%)であった(表2)。

これらの新生児との接触経験の合計は、平均 $10.0 \pm 3.5$ であった。

### 3. 各尺度の平均得点

基本的信頼感尺度は、下位尺度である基本的信頼感の平均が $24.7 \pm 6.3$ 、対人信頼感の平均が $23.7 \pm 4.5$ であった。

対児感情尺度は、接近得点の平均が $41.1 \pm 7.4$ 、回避得点の平均が $26.2 \pm 5.8$ であった。

あやすことへの自信は、「あなたは実際に新生児を上手くあやすことができますか」の平均が $3.5 \pm 1.4$ であった。

### 4. 新生児を上手くあやすことの背景別比較

3歳以上年下のきょうだいの有無はt検定、きょうだい・接触経験・基本的信頼感は一元配置分散分析を行い検討した。

きょうだいの数による比較では、上手くあやすことができるに有意差がみられなかった(表1)。きょうだいの年齢構成では、きょうだいの世話をした記憶があると考えられる3歳以上離れた年下のきょうだいの有無を検討した。結果は3歳以上年下のきょうだいの有無で上手にあやすことの有意差がみられた( $t < 106 > = 2.02$ ,  $p < .05$ )。

新生児を実際に見たことがあるかにおいて有意差がみられた( $F[2, 105] = 4.87$ ,  $p < .01$ )。Tukey法による多重比較の結果は、みたことがないと1～2回見たことがあるとの差が5%水準で、みたことがないと3回以上たびたびあるとの差が1%水準で有意となった(表2)。新生児に触れたことがあるかにおいて有意差がみられた( $F[2, 105] = 5.85$ ,  $p < .05$ )。多重比較では、触れたことがないと3回以上たびたびあるとの差が5%水準で有意となった。新生児を抱いたことがあるかにおいて有意差がみられた( $F[2, 105] = 3.85$ ,  $p < .01$ )。多重比較では、抱いたことがないと3回以上たびたびあるとの差が1%水準で有意となった。新生児をあやしたことがあるかにおいて有意差がみられた( $F[2, 105] = 10.22$ ,  $p < .01$ )。多重比較では、あやしたことがないと1～2回あるとの差、あやしたことがないと3回以上たびたびあるとの差が1%水準で有意となった。新生児の世話をしたことがあるかにおいて有意差がみられた( $F[2, 105] = 7.32$ ,  $p < .01$ )。多重比較では、世話をしたことがないと

1～2回あるとの差が5%水準で、世話をしたことがないと3回以上たびたびあるとの差が1%水準で有意となった。

表3 基本的信頼感とあやすことへの自信

	N	%	上手くあやすことへの自信		
			平均	SD	
基本的信頼感					
低群	35	31.3	3.2	±	1.5
中群	40	35.7	3.5	±	1.3
高群	37	33.0	3.9	±	1.5
対人的信頼感					
低群	30	26.8	3.1	±	1.7
中群	38	33.9	3.7	±	1.3
高群	41	36.6	3.7	±	1.4

\*\*p<.01      \*p<.05

基本的信頼感では下位尺度である基本的信頼感と対人信頼感を低群・中群・高群に分けて比較した。基本的信頼感における比較では、上手くあやすことができるには有意差がみられなかった。対人信頼感における比較においても、上手くあやすことができるには有意差がみられなかった(表3)。

表4 対児感情とあやすことへの自信

	N	%	上手くあやすことへの自信		
			平均	SD	
接近感情					
低群	31	29.0	3.0	±	1.5
中群	38	35.5	3.9	±	1.2
高群	38	35.5	3.5	±	1.6
回避感情					
低群	36	34.6	3.9	±	1.4
中群	41	39.4	3.5	±	1.5
高群	27	26.0	3.1	±	1.5

\*\*p<.01      \*p<.05

対児感情の接近得点と回避得点を低群・中群・高群に分けて比較した。接近得点において有意差がみられた ( $F[2, 104] = 3.81, p < .05$ )。多重比較では、接近得点の低群と中群との差が5%水準で有意となった。回避得点においては、有意差がみられなかった(表4)。

## 5. 相関関係

表5 相関

	きょうだい	接触経験	基本的信頼感	対人信頼感	接近得点	回避得点	上手く
きょうだい	1						
接触経験の合計	0.03	1					
基本的信頼感	0.05	0.07	1				
対人信頼感	0.29**	0.06	0.31**	1			
接近得点	0.08	0.09	-0.01	0.39**	1		
回避得点	-0.06	0.09	-0.11	-0.07	-0.02	1	
上手く	0.04	0.35**	0.21*	0.17	0.17	-0.23*	1

Pearsonの相関係数      \*\*p<0.01      \*p<0.05

きょうだいの人数・接触経験の合計・基本的信頼感・対人信頼感, 接近得点・回避得点, 上手くあやせると思うかの相関を求めた(表5)。きょうだいは, 対人信頼感と相関が有意であった ( $p<.01$ )。接触経験の合計は, 上手くあやすことができると相関が有意であった ( $p<.01$ )。基本的信頼感は対人信頼感 ( $p<.01$ )。上手くあやすこと ( $p<.05$ ) と相関が有意であった。対人信頼感はきょうだい, 基本的信頼感, 接近得点と相関が有意であった ( $p<.01$ )。接近得点は対人信頼感 ( $p<.01$ ) と相関が有意であった ( $p<.01$ )。回避得点は上手くあやすこと ( $p<.05$ ) と負の相関が有意であった。上手くあやせると思うかは, 接触経験の合計 ( $p<.01$ )。基本的信頼感 ( $p<.05$ ) と相関関係があり, 回避得点 ( $p<.05$ ) とは負の相関が有意であった。

## 6. 新生児を上手にあやすことができるかを規定する要因

表6 新生児を上手くあやすことを規定する要因

接触経験の合計	0.35**
回避得点	-0.25*
基本的信頼感	0.17
接近得点	0.16
R = 0.50    R <sup>2</sup> = 0.25**	
**p<0.01      *p<0.05	

新生児を上手にあやすことができるかを検討する目的で, きょうだいの人数, 接触経験の合計, 基本的信頼感, 対人信頼感, 接近得点, 回避得点を独立変数とし, 上手くあやすことができると思うかを従属変数として階層的重回帰分析を行った(表6)。新生児を上手にあやすことができるかを規定する最も有意な要因を探索した結果を表6に示す。重相関係数(R)は0.50, 決定係数(R<sup>2</sup>)は0.25であった。新生児を上手くあやすことができるかを規定する要因として, 接触経験の合計 ( $p<.01$ ) と回避得点 ( $p<.05$ )。基本的信頼感, 接近得点が抽出された。

## IV. 考 察

### 1. きょうだいの人数と構成について

新生児が自分の目の前にいると想定したとき、実際に上手くあやすことができるという肯定的な評価である「あやすことへの自信」へ関連すると考えられるきょうだいの人数については、有意差はみられなかった。これは、きょうだいが多くてもすべて年上のきょうだいの可能性もあるため、もっともな結果と言える。しかし、きょうだいの構成において、3歳以上年下のきょうだいの有無で、あやすことへの自信に有意差がみられた。これは、きょうだいの数ではなく、年下のきょうだいがあやされている様子を記憶していたり、実際に自分自身があやしたり世話をした記憶が関連していると考えられる。

G. コーエンは幼児期の記憶において「弟妹が生まれたときに3歳以下であったという学生は周囲の環境についてはほとんど何も再生できなかった」と述べている。このことから、新生児を「上手くあやすこと」は、年下のきょうだいが生れたときの年齢により、どれだけ年下のきょうだいがあやされたり、世話をされているかということを記憶にとどめることができるかに係わってくる。

### 2. 新生児への接触経験と対児感情について

実習前の看護学生の新生児をあやしたことがあるかの経験は、33%の学生があやしたことがなかった。1～2回あやしたことがあるが39%、3回以上たびたびあるが27.7%であることから、たびたびあやした経験のある学生は3割弱であり、それ以外の学生は接触経験があまりないと考えられる。また、実際に新生児をみたことがない学生も14.3%あった。このように新生児への接触経験の少なさから、実習において新生児を目の前にして学生が戸惑うことはもつともであると考えられる。表6の結果から、接触経験の合計が新生児をあやすことへの自信に関連していると考えられる。そのため、接触経験を増やすことは、新生児をあやすことへの自信に繋がると考えられる。

対児感情における回避得点があやすことへの自信に有意に規定する要因として抽出されている。回避得点とは、新生児を思い浮かべた時「こわい」「よわよわしい」「むずかしい」と感じる得点である。そのため、接触経験は重要であるが、その中でこのような回避の感情がうまれると新生児をあやすことへの自信には繋がらないと考えられる。そのため、接触経験は、経験の数だけでなく、それがどのような対児への感情になるのかが重要だと考えられる。

また、接近得点の中群が、低群・高群より、あやすことへの自信が高かった。接近得点は、新生児を思い浮かべた時「あたたかい」「ほほえましい」「ういういしい」と感じる得点である。そのため、このような感情が高い場合も低い場合も、新生児をあやすことの自信に繋がらないと言える。そのため回避得点同様、どのような対児への感情になるのかが重要だと考えられる。



### 3. 基本的信頼感について

基本的信頼感と対人信頼感を低群・中群・高群に分けて比較した結果からは、新生児をあやすことへの自信への有意差はみられなかった。しかし、基本的信頼感は上手くあやすことへの自信と相関があり、新生児を上手くあやすことを規定する要因としてもあげられた。そのため、自己を信頼に値するという自覚が、新生児をあやすことへの自信に繋がっていると考えられる。

## V. 結 語

本研究では、看護学生の新生児をあやすことへの自信から見出される背景を検討した。この新生児をあやすことへの自信は、「自分の目の前に新生児がいると想定したとき、実際に上手くあやすことができるか」という想定で自信を聞いているため、これはまだ、実際にあやすこととは結び付いてないと考える。ここには今回の研究でわかることの限界がある。しかし、看護学生が実習までに少しでも自信をつけられるよう、新生児は無理でも乳幼児と触れあう体験を積み、新生児の理解を積むことで「こわい」・「よわよわしい」・「むずかしい」というイメージが強くなりすぎないようにしておくことが有用ではないかと考える。

### 謝辞

本研究のご協力いただきました皆様に謹んで感謝いたします。  
本研究の一部は、第47回日本母性衛生学会にて発表しました。

### 文 献

- 川村晴子, 井上利恵, 平井タカネ (1987): 家庭における子どもの遊び (5) —あやし遊び (ことば・うた遊び) のビデオ解析から—, 日本保育学会大会発表論文抄録, 40, 228-229.
- 川村晴子, 井上利恵, 平井タカネ (1987): 家庭における子どもの遊び (6) —あやし遊び (からだ遊び) のビデオ解析から—, 日本保育学会大会発表論文抄録, 40, 230-231.
- 川村晴子, 中西利恵 (1990): 家庭における子どもの遊び (9) —父親のあやし遊びについて—, 日本保育学会大会発表論文抄録, 43, 284-285.
- G. コーエン, 川口潤 訳 (1992): 日常記憶の心理学, サイエンス社, 151-159.
- 谷 冬彦 (1996): 基本的信頼感尺度の作成, 日本心理学会60回大会発表論文集, 310.
- 谷 冬彦 (1998): 青年期における基本的信頼感と時間的展望, 発達心理学研究, 9 (1), 35-44.
- 花沢成一 (1992): 母性心理学, 医学書院, 65-70.
- 堀 洋道監修, 山本真理子編 (1994): 人間の内面をはかる<自己・個人内過程> (心理測定集I), サイエンス社, 65-75.
- 松井 豊編 (1994): 心の健康をはかる<適応・臨床> (心理測定集III), サイエンス社, 112-115.
- 藤田浩子編著 (2003): 首のすわるころまで人と人のかかわりを育てる, 1-4, 一声社.